フランツィスカ・ツー・レーヴェントロウのこと

濱　川　祥　枝

1.　両親，ことに母親との軋轢

Hat dir die Liebe mit weichem Hauch
die Kinderstirn umspielt?
Hast du die segnende Hand einer Mutter gefühlt?

Weißt du, warum ich hart geworden,
Kalt und hart?
Weil mir keiner Mutter Liebe
je gelacht.

(子供のころのわたしの額(ひたい)を，かつて
愛の息吹きが優しく包んでくれたことがあったかしら？
私は，母親の祝福の手を感じたことがあったかしら？

私がなぜ，こんなに頑(かたく)なな，
こんなに頑なで冷たい女になったかお分り？
それは私が，母の優しいほほえみを受けたことが
一度もなかったから。)

この詩は，1891年ごろのものというから（Ⅰ.-(2)，265ページ)，作者は20歳くらい。そして，この幼時の家庭生活への不満と，故郷を失ったと

いう感情とは，彼女の生涯を決定づける要素の一つとなった。

Franziska Gräfin zu Reventlow は，1871年５月18日，デンマークとの国境に近いドイツ北辺の町フーズム (Husum) で生まれた。父はプロイセンの高級官僚 (Landrat), 母も某伯爵家の出身である。同胞は，姉１人，兄３人，弟１人という６人きょうだいで，なかでは３歳年下の弟カール (Karl) — 通称カティ (Catty) — といちばん気心が通じていたらしい。フランツィスカの本名は Fanny Liane Wilhelmine Sophie Auguste Adrianne という長たらしいものだったが，「ファニー」という名前を嫌ったフランツィスカは，成年に達してからはもっぱら Franziska〔Gräfin〕zu Reventlow を名乗った。

ツー・レーヴェントロウ家は，わが国では „Gemeinschaft und Gesellschaft“ (1887年)[1] の著者として知られているフェルディナント・テニエス (Ferdinand Tönnies, 1855–1936) や，「みずうみ」(Immensee, 1850),「三色すみれ」(Viola tricolor, 1873/74) などでつとに馴染みのある「海辺の灰色の町の詩人」テーオドール・シュトルム (Theodor Storm, 1817–1888)と親交があった[2]。

ところで，フランツィスカにとって人生最初の不幸は，母親との確執だった。自伝的作品である「エレン・オレストイェルネ」[3] (Ellen Olestjerne, 1903) にも，リューベック (Lübeck) 時代の親友フェーリング (Johannes Emanuel Fehling, 1873–1932) あての手紙にも，この種の嘆きが頻繁に出

1) ふつう「共同社会と利益社会」と訳されているが，「ゲマインシャフト」および「ゲゼルシャフト」の２語は，こんにちではそのまま日本でも通用しているようだ。なお，この本のドイツ語は相当な難物である。

2) フランツィスカに，「テーオドール・シュトルムの思い出」(Erinnerungen an Theodor Storm) という，フランクフルト新聞 (Frankfurter Zeitung) の1897年71号に発表された５ページ足らずの文章があるが（Ⅰ.-(2)，280ページ以下)，シュトルムがフーズム市民の非常な尊敬を受けていたこと，その辺幅を飾らない人柄，無神論的傾向，幽霊信仰など，シュトルムに関心のある向きには逸すべからざる記録の一つであろう。

3) このデンマーク風の名前の假名表記には残念ながら自信がない。

てくる。参照文献Ⅱ.-(3)の表題も，1890年11月29日付書簡の末尾に近い一節（Ⅰ.-(4)，154ページ）から採ったもので，全文を引用すれば次の通りである：

> *Die kleinste Fessel,* die andere gar nicht als solche ansehen, *drückt mich unerträglich,* unaushaltbar und ich muß gegen alle Fesseln, alle Schranken ankämpfen, anrennen.
>
> (ほかの人たちなら軛(くびき)などとはまったく感じないどんな軛でも，私は，耐えられないような，やり切れないような思いがし，私は，どんな軛にも，どんな制約にも，つい戦いを挑み，突っかかっていってしまうのです。)

フランツィスカが，当時の標準的な伯爵令嬢で，„Viragines oder Hetären?“（後述参照）で述べられているような，「子供のころはお利口さんで，素直に学校へ通い，両親もしくは女家庭教師とお行儀よく散歩に行き，長じては，その時その時の状況に応じて，家事を手伝ったり，一家の飾りの役割を果したりし，婚約してのちは，慎ましく顔を赤らめつつ嫁入り道具の縫物に精を出し，妻となっては，気を配り愛情を傾けて良人を扶け，閨房にあっても，キリスト教徒としての義務を真面目に遵守し，娘たちをも，自分が辿ったと同じ，何の希望もない退屈な人生を歩むよう教育する」といった風であったら（Ⅰ.-(2)，469ページ），彼女も，当時の貴族階級の子女にふさわしい教育を受けたあと，身分相応の結婚をし，何人かの子供の母となり，平凡かつ波瀾のない一生を送ったことであろう[4]。

4) もっとも，母親との折合いもよく，模範的な伯爵令嬢のはずだった10歳年上の姉アグネス (Agnes) は，どういう事情でか，のち修道院に入っている（Ⅰ.-(4)，583ページ）。

しかし，フランツィスカは，一風変わった女の子だった。小さいころから，家庭内での男のきょうだいたちと自分との扱いの差に不満を持ち，「自分も男の子だったら」といつも思っていた。

リューベック近郊アルテンブルク (Altenburg) の女子寄宿学校 (das freiadlige Magdalenenstift. 1886年入学，翌年放校）でも，校則違反の限りをつくしてさんざん先生たちを悩ませたことは，1886年秋および翌87年春の通信簿の「特記事項」(Besondere Bemerkung) に，それぞれ，「注意散漫にして物忘れ多し」(Sie ist zerstreut und vergeßlich),「義務感と真面目さに欠けるところあり，他生徒たちへの悪しき手本なりき」(Durch Mangel an Pflichttreue und Gewissenhaftigkeit war sie ein nachteiliges Beispiel für Andern) と書かれてしまっている（Ⅰ.-(2)，526ページ以下)。

「ほとんど戦争状態と言ってもいいほど」だった母親との関係（1890年4月16日付フェーリング宛書簡．Ⅰ.-(4)，15ページ）と並んで，父とのあいだも，「お互いに理解しあうことなど絶対に不可能です。それにむろん，父にして見れば，私の側につくこともできません。そんなことをしたら，それこそ我が家(や)は修羅場になってしまうでしょう」(同じ書簡，同ページ)という有様だったことも，フランツィスカの不幸を助長した。

そして，彼女と家庭とのあいだの断絶は，1893年7月の父の死を契機として決定的なものになった。

この件については，「エレン・オレストイェルネ」に詳しく述べられている（Ⅰ.-(1)，127ページ以下）ほか，1896年5月2日発行の雑誌 ‚Simplizissimus‘ 第1巻第5号に発表された「父」(Vater) と題する5ページほどのスケッチ（Ⅰ.-(2)，305ページ以下）がある。

これら二つの文章から再構成すると，事のいきさつはおよそ以下のようだった：

父と決裂して家を出てから約2年，ミュンヒェンで生活のため悪戦苦闘していたフランツィスカ宛の長兄からの難詰の手紙のなかに，父の病気の

ことがあったが，その後しばらくして彼女は，ほかのルートを通じて，病状は良くなったという情報を得ていたところへ，ある日の早朝とつぜん，末弟カティから，まず「父危篤」の，ついで矢継早に，「絶望的」「病状変らず」「来るには及ばず」の電報が続いた。昼すぎの列車に飛び乗り，望郷の思いと，いままた甦った父母――ことに，厳格な中にも愛情と優しさを秘めていた父――への憧れとに身を焦がしつつ，8時間かけて，故郷の暗い駅頭に降り立つと，彼女を迎えたのはカティと某司祭の二人で，家族一同の代理と称するその聖職者は彼女に，「あなたには最早ここに用は無いから直ちに戻るよう」告げたのだった。「あなたには，臨終のお父さんを見舞う権利も，その死を悼む権利も，実家に対する一切の権利もないのだから，自分で選んだ悲惨な世界に戻ってゆくがいい」と言うのである。「お父さんには会わせない。いざとなれば自分が体を張ってでも阻止して見せる」とまで告げられては，その日は諦めざるを得なかった。なお数日を知人宅ですごしたのち，「父は死んだ。いまなら来てもよい。もう一度父に会わせよう」との連絡が入る。母親は，この期(ご)に及んでもフランツィスカに会おうとせず，フランツィスカは，家族の団欒を戸外から横眼で眺めただけで，未練を残しつつミュンヒェンに戻った。

ここにフランツィスカは，故郷と，そして父母の家との関係を完全に絶ったのである[5)]。

2. 男性遍歴

TREULOS bin ich gewesen
und hab dich einst doch geliebt.
Kannst du mir vergeben,

5) もっとも，母親もそれほど酷い女だったわけではなく，親戚のあいだでは，「いくらか頑なところはあったものの，どちらかと言えば気立てのいい女ということになっていた」との証言もある（Ⅱ.-(6)，401ページ)。

wenn ich dein Leben getrübt?

Treu hatt' ich dir geschworen,
Liebe und ewige Treu.
Aber in wilden Stürmen
brach sie entzwei.

Als du heim aus der Fremde kehrtest,
war ich dein nicht mehr.
Ich lag in anderen Armen
von brennender Liebe verzehrt.

(私はあなたを裏切りました，
昔はあなたを，あんなに愛していたのに。
あなたの人生を暗くしてしまった私，
あなた，許して下さる？

たしかに私は，あなたに永遠の貞操と
永遠の愛を誓っていましたわ。
でもそれも，私の胸に荒れ狂った嵐で，
ずたずたになってしまって。

あなたが私のもとに戻られた時，
私はもうあなたのものではなく，
燃える恋の炎に焼かれて
ほかの人の腕に抱かれていました。

……)

これは1893年ごろの作（Ⅰ.-(2)，268～269ページ）というが，22歳の乙女にしては驚くべき内容である。そしてこの「不倫癖」は，一生フランツィスカに付いてまわった。「さそふ水あらば……」（古今和歌集938，小野小町）どころではない。

フェーリング宛1890年12月17日付の書簡（Ⅰ.-(4)，165ページ以下）には[6]，「私が時折，自分の中には何か精神病のようなものが潜んでいるのではないかと思って戦慄することがあることまでお話したほうがいいかしら？　私の心の中には，時としてさまざまな不安が雲のように湧き上ってきて，私の心を雁字搦(がんじがら)めにし，いっとき私の心を暗くしたあと，また過ぎ去っていきます……」「子供のころの私が，自分をとても不幸だと考えていたことは，もう何度も何度もお話ししましたわね――でもそれは，表面的なこと，内々(うちうち)関係のことにすぎませんでした。実を言うと私は，自身のことで酷く悩んでいたのです。子供のころの私は，まだそれなりに満足してのんきに暮らしていたのですが，そのあと，思春期に入ってからの数年間は，周囲の人たちの想像を絶する，何とも名付けようのない肉体的な興奮と不安に悩まされました。周りからはいつも，機嫌の悪い子だとか，すぐ興奮する子だとか言われていましたが，誰一人，すぐそれと察しがつくはずの本当の原因に思い当たってくれる人はおらず，独りで死ぬほど悩みましたが……それも，これほど当たりまえのことを知るチャンスが私には與えられていなかったからです……でも，私自身にすら自分のこの興奮と不満の原因が分っていなかったことは，あなたも

6)　フェーリング宛の書簡は，1890年3月から翌91年10月までのわずか1年7ケ月のあいだに，「書簡集」で260ページほどの分量があり，ことにこの1890年12月には，ここに引用した分を含め，12月1～4日，7日，9日，11日（2通），14日，16～19日（16日には2通），24日，25日，27～31日（31日にも2通）と，計21通，しかもそれぞれかなり長文の手紙を書いている。

察して下さることでしょう。そして，はじめての年，どんな人なのかほとんど知らないある男の人に夢中になり……それも，当時まだ14歳だった癖して，全身全霊を挙げて打込んだのも，今では，性的興奮に過ぎなかったことが分ってきました……」とある。

以上の引用文のはじめの部分は，どんな女性も一度は通過するはずの青春の悩みの一形態と思われるが，後半はいささか趣きを異にする。フオン・ランツァウは，「不羈奔放」と並んで，「性欲の異常な強さ」をフランツィスカの根本的性格の一つとし，その証拠としてこの書簡を挙げている（Ⅱ.-(6)，401ページ）。

性〔欲〕は，微妙なテーマである[7]。性欲は，男性と女性とではその性格が違うのか？　性欲の強さ・弱さについて基準はあるのか？　何をもって正常とし，何をもってアブノーマルと断ずるのか？　ある人間の性的行動が職業や学歴とは何の関連もなく，まして外観などからは窺(うかが)い知れないことは，かの「キンゼイ報告」(「男性篇」1948年，「女性篇」1953年)によっても明らかであるし，「画期的」とされたこの報告書にしても，アンケートへの回答が100パーセント正直なものかどうかの保証はあるまい。厳密に言えば，ある人間の性生活を知っているのは，当人とその相手だけ

7) 素人の眼からすれば，人間を含めた全生物界が男性と女性という――むろん中間形態もあれば，両性のあいだを往き来したり，一定期間は男性あるいは女性だけという生物その他，いろいろあるようだが――2つの性に分かれているのは，たまたまそうなっただけで，場合によっては3つ以上の性もあり得たのではないかと思えるが，生物学の立場から言うと，どうやらそうではないらしい。Wolfgang Wickler / Uta Seibt の共著 „männlich weiblich – Der große Unterschied und seine Folgen“（男性と女性――この大いなる相異とそこから来る諸結果）(München / Zürich 1983) には，「ただ1つの性しか存在しないという状態は考えられないだろうか？　それとも，ひょっとして，2つ以上の性の存在は？　答えは否である。2つ以上の性の存在などあり得ないのだ。そして，現に存在するこの2つの性は，逸脱を許されないある仕方で，必然的に，相互に分たれているのである。そしてこの〈必然的に〉ということの意味は，地球上の生(せい)がいま一度そもそものはじめから始まることがあり得るとしても，じじつ，全く同じ特色と相異とがふたたび現われるだろうという意味である」と述べられている（同書46ページ）。

かも知れない。そして，通常のわれわれが知らない，あるいは想像すらつきかねる人間の性的行動の範囲は，とてつもなく広くかつ複雑なようだ。

われわれにとって，性の悩みは深い。あれほどの才女だった有吉佐和子にしても，女性の生理にはずいぶん悩まされていたらしいし（丸川賀世子：有吉佐和子とわたし．文藝春秋 1993年刊の115ページ，116～117ページ，119ページなど），かねてホモの噂のあった三島由紀夫については最近かなり赤裸々な記述が出たし（福島次郎：三島由紀夫 —— 剣と寒椿．文藝春秋平成10年刊），一面的ではあるがある意味では卓抜な両性論である「性と性格」(Geschlecht und Charakter, Wien 1903) を書き，その末尾近くで（1980年の新版では459ページ）「女性的なものによって天上へ引き上げてもらったゲーテ（「ファウスト」の末尾）よりは，たった一人で苦闘しつつ更に更に上へと上っていったカントのほうが偉かった」(es ist leichter, sich hinanziehen zu lassen, wie Goethe, als einsam zu steigen und immerfort zu steigen, wie Kant) と書いたオーストリアの奇才オットー・ヴァイニンガー (Otto Weininger, 1880–1903) は —— 自分の男女論に殉じる恰好で —— 22歳の若さでピストル自殺を遂げた。「愛についての断片」その他，男女関係について多くの哲学的考察やすぐれた女性論 —— たとえば「女性的文化」(Weibliche Kultur) を残したゲオルク・ジムメル (Georg Simmel, 1858–1918) も[8]，「ゲオルク・ジムメルへの感謝の書」(Buch des Dankes an Georg Simmel – Briefe, Erinnerungen, Bibliographie, Berlin 1958) によれば，正式の夫人とのあいだに男の子が一人いたほか，Gertrud Kantorowicz とのあいだに女の子を一人もうけ，正妻への配慮からか，その娘には一度も会わずに終わっている（同書280ページ）等々……[9]

8) あらゆる現象を二元論の立場から考察することを好んだジムメルにとって，男性と女性の存在などという現象は，絶好のテーマであったはずだ。

9) 第一，旧約聖書（創世紀第２章21節）などにもとづく，「最初の人類は男性であり，女性はそのあとで生まれた」とする「神話」も，今日では揺いでいる。最新の生物学によると，どうやら女性のほうが先に生まれたようだ。また，ヒトの遺伝的性がいつどのようにして決定するかさえ，いまなお必ずし

というわけで，私には，フランツィスカが「異常に強い性欲の持主だった」とまで断ずるつもりはないが，二度の正式結婚（最後のそれについては最終章で詳述）はそれぞれごく短いものだったとは言え，シュヴァービング (Schwabing) 時代(後述)をはじめとして，情を通じた男性は優に十指に余るばかりか，複数の男性と同棲したり，複数の男性と長期の旅行もしていること，さらに，金に窮した場合，いまで言えば「テレフォン・クラブ」まがいの組織を利用して売春することも辞さなかったことなどを考えると，多情または多淫な女性だったことは否めないと思う。

1909年３月のシュミッツ (Oskar A. H. Schmitz, 1873–1931) あて書簡に，そばにいた見知らぬ男から突然「もうひとり奴隷はいりませんか？」と話しかけられたとあることや（Ⅰ.-(4)，460ページ）――ただし，その後どうなったかについての記述はない――，1901年６月21日の日記（Ⅰ.-(3)，192ページ）に，「私の奴隷のシュテルン（注35)参照）に命じてパンチを持ってこさせたあと，首のところを踏んづけてやった」という記述があるところを見ると，フランツィスカにはサディズムの傾向もあったと思われる反面，ミュンヒェン時代，いつとも知れず彼女のところへやって来てはその身体をほしいままにしたあと，いつとはなくまた消えてゆく男性に何の抵抗も感じなかった事実などを見ると，マゾの気(け)もあったのではないか？　もっとも，この種の話題は，日記においてさえ必ずしも明らかに記述されているわけではないから，その詳細を再構成することはむつかしい。

もはっきりしていないらしい（1998年６月13日付朝日新聞夕刊に載った「未知しるべ」(宇野賀津子）による)。また，1998年８月５日付朝日新聞夕刊の科学記事（海⑯）によれば，日本で産卵するウミガメの性別は孵化期間中の砂の温度によってきまり，アカウミガメの場合，一定温度より高ければメス，低ければオスが多くなるという。もっとも，われわれ素人にとっては，「女性と男性のどちらが先に生まれたか」より，現にこの二つの性が存在しているという事実のほうが重要で，しかも，この両性にどのような能力，可能性が秘められているかは，まだまだ未知数なのである。

「パウルからペドロへ」(Von Paul zu Pedro – Amouresken, 1912)[10] は，ある女友達への書簡の形を借りたフランツィスカの――彼女にとっては晩年の，従っていささか枯れた――恋愛談議であるが――その終りのほうに，「本当に困ってしまうのよね――誰か男の人をしっかり掴まえて，長つづきする関係ができたと思うとたちまち飽きがくるし，そうかと言って，その男を手離さなければならないとなると，またしても後悔することになるのですもの」とある（Ⅰ.-(1)，95ページ)。

フランツィスカが第何番目かの恋人ヴォルフスケール (Karl Wolfskehl, 1869–1948) に次のように書くとき，彼女の心に嘘いつわりがあるわけでは決してない（1903年２月．Ⅰ.-(4)，419ページ)：「私がこれほど豊かな気持ちですごしたことは一度もありません。あなたがいらして以来，私にとっては，毎日が黄金の日々でした。はじめのうちは，半ば夢を見ているようで，さっぱり訳が分りませんでしたが，いまでは，私の眼は両方ともぱっちりと開き，存分に光を吸っています。こんなこと，はじめてですが，いまの私は，あなたがおいでにならなくても，いつもあなたのお姿が見えていますし，私の名前を呼んで下さるあなたのお声が聞えます。あなたにお眼にかかり，あなたを抱きしめたくて仕方がありませんが，たとえあなたが遠くにいらしても，悲しくもなければ不安にもなりません。だって，あなたはいつも私のまわりにいらっしゃるのですし，遠くからあなたを恋い慕うというのも，これまたとても嬉しいことですもの……」

そして，自分が好意を寄せている才色兼備の女性[11] にこんなことを言

10) フランツィスカ自身は „Teegespräche“（「ティータイム雑談」とでも訳せようか？）としたかったのを，出版社の要求に従ってこのタイトルにしたらしい（1911年12月26日付ヘッセルあて書簡（Ⅰ.-(4)，495ページ)。

11) ヴォルフスケールより１人まえのフランツッスカの恋人だったクラーゲス (Ludwig Klages, 1873–1956) は，一兒をもうけたあとの彼女を「幼兒イエスを抱いたマドンナ」(Madonna mit dem Kinde) に比しているし（Ⅱ.-(2)，53ページ参照)，フランツィスカと深くかかわり，後述のように彼女の二回目の結婚の橋渡し役もつとめたミューザーム (Erich Mühsam, 1878–1934) は，「最高度の女性的魅力を備えた」(ausgezeichnet von höchstem weiblichem

われては，相手が舞上るのも無理はない。しかし，次の瞬間，あるいは同じ瞬間にすら，フランツィスカの心の中にほかの男性の姿が浮かんでいるかも知れないことを，彼女を恋人にした男は常に覚悟していなければならなかった。

3.

(イ) フランツィスカと宗教

フランツィスカが1903年ごろ執筆し，全文が公刊されたのはⅠ.-(1)の482ページ以下がはじめてという（Ⅱ.-(1)，263ページ参照)，「教育と倫理」(Erziehung und Sittlichkeit) と題する論文がある。

これは，性欲と性道徳の乖離(かいり)という不自然な状態を生んだのは，人間性の自然の発露である性行為を「罪」(Sünde)ないし「原罪」(Erbsünde) と極めつけたキリスト教の責任であるとするもので，その結果，たとえば，カトリックの司祭には「独身」(Zölibat) が要求される一方では，「牧師館の料理のおばさん」(Pfarrersköchin) なるものの存在が半ば公認され，口さがない庶民に，「悪魔だってあのおばさんを地獄へ引っ攫(さら)ったりはしないよな。だって，つまるところ，司祭様だって生身(なまみ)の人間で，われわれ同様，〈肉の誘惑〉(Anfechtungen des Fleisches) に苛まれてござっしゃるのだから」などと言ってからかわれてしまうのだ。

キリスト教によって，「性」という自明の現象に対する自然な態度が損なわれるとともに，他方では，秘密めいたもの，禁じられたものに対する好奇心は助長される。学校で，「父母をうやまえ」「結婚は神ご自身が定め給うた聖なる制度である」と教えられた子供たちが，教会では，「私は罪によって受胎された哀れな存在です」と祈ることを要求される矛盾。これ

Charme) と彼女を讃えているそうである（Ⅱ.-(3)，5ページの引用参照)。残っている写真（たとえば図版(8)(9)参照）を見ても，それほどの美人とは思えないが，文学史にその名を残すほどの男性を何人も惹きつけたところから察するに，面と向えばよほどチャーミングな女性だったのだろう。

では，子供が，「自分の両親は何かうしろめたいことをしているのではないか，それはいったい何だろう？」と考えるのも当然であろう。マリアがキリストを生んだのと同じ行為が，自分たちの生活の中では，細心の注意を払って隠蔽されるか，または馬鹿げた「コウノトリの話」で誤魔化されてしまう。こうした矛盾は，キリスト教社会のすみずみまで浸透していて，結局，キリスト教が約束してくれているのは，誰一人自分の眼では確かめたことのない，来世における幻想的財宝にすぎず，これでは，ひたすら死後の世界に憧れるほかない云々……

こういう考えを持っていたフランツィスカが，当時の法すれすれの行為に及んだのは止むを得ない。

彼女に「最後の審判」(Das Jüngste Gericht) および「最後の最後の審判」(Das allerjüngste Gericht) という短編があり（Ⅰ.-(1)，441ページ以下)，ともに1897年，‚Simplizissimus‘ 誌に発表された。前者は，神と使徒ペテロが，検事一人の補佐のもと，おたおたしながら「最後の審判」をやってのけるが，すべてはある弁護士見習の夢だったというおちの，他愛もない内容であるが，これが瀆神(とくしん)の罪に問われて起訴されたのである。けっきょく無罪放免になったが，「最後の最後の審判」の方は，その法廷の模様を面白おかしく描いたもので，検察側は被告たちのおのおのに(出版社側も起訴されていたのである)「重懲役１年，死後４年間にわたる公民権の喪失，ならびに，被告およびその墓を警察の監視下に置くことの許可」を求刑したことになっている。

以上のことや，先述したシュトルムへの親近感，フーズムに居たころ，無神論者という風評のあったテニエスとの交際で家族の顰蹙(ひんしゅく)を買っていたことなどを考えあわせると，彼女は，宗教なるものにはほとんど関心を寄せていなかったと考えられる[12),13)]。

12) もちろん，彼女が書いたものの中に「神」という言葉は頻出するが，そのほとんどはドイツ語における慣用的用法であって，宗教的意味は持っていない。

(ロ) フランツィスカの男女観

フランツィスカは，1898年と1899年の2回，パニッツァ (Oskar Panizza, 1853–1921) が主宰していた雑誌「チューリヒ評論」(Zürcher Diskußionen) に，それぞれ「女性の男性幻想」(Das Männerphantom der Frau) および „Viragines oder Hetären?“ という文章を発表している[14]。

前者でフランツィスカは，当時の良家の娘たちが受けていた性教育の実態を嘆いたあと，しかし，イプセンその他の新しい文学によって目覚めた一部の「女性活動家たち」(Bewegungsweiber) は，「清純無垢なること天使のごとき乙女たちをむざむざ悪魔のような男どもの腕に投じさせている」現状を打破しようとするに当って，「男性を敵ないしは軽蔑の対象として復讐を企てるが，それは間違った戦法だ。しかも，これらのヒステリックな女性たちが「母性」なるものに一顧だに与えないのは不思議である」と主張する。

そして，ニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844–1900) —— ふつうは女

---

13) 私自身は，フロイト (Sigmund Freud, 1856–1939) がその「ある幻想の未来」(Die Zukunft einer Illusion, 1927) —— 人文書院版「フロイト著作集」第3巻（1969年）の362ページ以下には拙訳が収められている —— で披瀝した宗教観におおむね賛成である。
私も，宗教の「効用」を認めるにやぶさかでない。宗教がなかったら，さまざまな困難が現出するであろう。ソ連に倣って公的には宗教を否定していた旧東ドイツでも，こんにち，教会は息を吹き返しつつあると伝えられる。
しかし，十字軍や30年戦争を持ち出すまでもなく，宗教がらみで多くの血が流されたことは，疑うべくもない事実である。いまなお世界各地で継続している紛争に宗教色が濃いことも，衆知の通りだ。共産主義を一種の宗教と断じたフロイトは，理想的共産主義の実現可能性を一笑に付したが，彼の予言は，少なくとも現在までのところ，見事に当っている。宗教を取るか理性を取るかと問われたら，理性の頼りなさは承知しながらも，私は，フロイトと共に後者を選びたいと思う。
なおこのフロイトの論文は，「幻想の未来」と訳されることがあるようだが，原題の不定冠詞には特定の意味があり，この場合の ‚eine Illusion‘ は明らかに「宗教」を指しているから，拙訳のほうが原意に近いように思う。

14) パニッツァはいささか変った経歴の持主で，医学を修め，みずから精神科医でもあったが，筆禍事件で投獄されたり，慢性パラノイアで入院したり，何度か自殺を試みたりしたあげく，バイロイト (Bayreuth) の施設で死去した。

性の敵と言われているけれども，じつは女性のことを女性自身よりよく理解していたニーチェ――の，「女性のすべては一箇の謎であるが，その女性の謎を解く鍵がたった一つある，それは妊娠だ」(Alles am Weibe ist ein Rätsel, und alles am Weibe hat Eine Lösung: 〔sie heißt〕 Schwangerschaft.) という言葉を肝に銘ずべきだとする[15),16)]。

2つ目の論文では，フランツィスカの女性観はいっそう鮮明かつ過激になる。この標題[17)] を直訳するのはむつかしいが，意訳すれば，「女性として，あくまで男女同権や男女平等を主張し，これまで男性に独占されていた生活分野への進出を計るか，それとも，従来の性差をそのまま承認し，女性の分(ぶん)を守りつつ，あくまで女性本来の領域にとどまるか，どちらが得策か？」とでもなろうか？

フランツィスカの論旨は，「男女平等などという馬鹿気た主張はやめて，女性は女性本来の領域にとどまるべし」というに尽きる。

むろん，フランツィスカが当時の女性が置かれていた状況を100パーセント肯定していたわけではない。しかし，その少しまえから始まっていた

---

15) これは「ツァラトゥストラ」(Also sprach Zarathustra, 1883–1885) 中の言葉であるが，リューベックの「イプセン・クラブ」(Ibsenklub) に所属していたころのフランツィスカは，ニーチェのこの書をバイブルと崇めていた。20歳そこそこの彼女がどの程度までニーチェを理解していたか，疑問の残るところである。
また，ニーチェに女性に関する発言が多いこと，それも，この言葉の達人にふさわしく，いかにも気の利いたアフォリズム――それも反女性的なもの――が多いことは事実であるが，それらの女性についての発言が，どの程度まで実体験に基づいていたのか，これまた疑問の余地なしとしない。

16) なお，この文章の中でフランツィスカが，「たくさんの恋愛を経験し充実した人生を送ってきた女性こそ最良の母親になるというのは，しばしば観察される事実である。日本では，一定の年月をお茶屋 (Teehäuser) ですごした女性たちこそ主婦として最適だとすら言われており，この場合のお茶屋とは，女性がサービスするベルリンの酒場 (Kneipe) とほぼ同じものと考えられる」と述べているのは一種の御愛嬌であろう。

17) もともとフランツィスカがこの論文につけたタイトルは「女性にふさわしいこと」(Was Frauen ziemt) だったが，パニッツァの意向で，今の題に改められたという（Ⅰ.-(1)，468ページの編者注)。

いわゆる「女性解放 (Emanzipation) 運動」には疑問を提出する。

たとえば，当時の女性労働者が置かれていた劣悪な社会環境の改善にはもとより大賛成で，そうした方向での男女の協力の必要は強調する。しかし，いわゆる「戦う女性たち」(kämpfende Frauen) が主張していたような平等と同権の要求，大学やさまざまな職業の女性への解放などにはむしろ反対の立場を取る。つまり，「男性にできることは自分たちにも全部できる。そうなっていないのは，何百年にも亘る圧迫と習慣のせいにすぎない」とする過激派の主張は間違っていると考え，「男と女という，何から何まで違った風に創られた２つの存在が，全く同じ仕事をして全く同じ成果を挙げられるはずがない。生理構造からして，両性にはそれぞれ異った適性があるはずだ」とし，「女性が受け持っている，外面的には受動的と解釈される役割は，女性にとって何ら屈辱的なものではなく，不感症の女性はともかく，真の性愛に目覚めた女性たちは，自分より物理的に力の強い男性を誘惑し，忘我の陶酔に引摺り込むことに無限の喜びを感ずるはずだ」とまで言う。

もちろん，教育の機会均等が実現し，さまざまな分野への女性の進出がいちじるしい100年後の現代に生きるわれわれから見れば，フランツィスカの意見で訂正を要する箇所はいくつもある。

たとえば，フランツィスカは，軍人・政治家などという「攻撃的な職業」はそもそも女性には向かないとしているが，こんにちでは，軍隊や政界はもとより，かつては思いも寄らなかった分野にも女性の進出が著しいばかりか，「逆差別」という言葉さえ生れていることは周知のとおりである[18)]。

18) この点，ドイツ語教師としての私が特に興味を惹かれるのは，フランツィスカが，自説の根拠として，「だってドイツ語で ‚den Mann stellen ないし stehen‘ という言い方は定着しているが，‚das Weib stellen‘ とか ‚den Menschen stellen‘ などと言おうとは誰も思い付かないだろう」と述べている点である。ドイツ語における「フェミニズム」(Feminismus) ないし「性差別」(Sexismus) の問題は，それだけで優にひとつの論文のテーマたり得るが，じつは，フラ

女性が医師，弁護士，裁判官などの職に就くことを否定するフランツィスカの見解も，今日ではおそらく維持しがたいであろう[19]。ただし，「女性裁判官や女性弁護士となると――私は，厳格な倫理観の持主である同性たちで構成される法廷で裁きを受けなければならないと考えただけで，大多数の女性被告は，自殺を計るか偽証に走らざるを得ないのではあるまいか」というフランツィスカの考えは，現在でも通用するように思う[20]。

そしてフランツィスカは，「女性は，この世のさまざまな困難に立向かうようには作られていない……女性は，言葉の極上の意味においてのぜいたく品であって，女性が本来あるべき姿に留まるためには，保護され慈(いつく)しまれることが必要だ。女性は，苛酷な生存競争には向いておら

ンツィカの主張に反し，フェミニズムの波は，すでに上記の表現をも侵しはじめているのだ。

,den Mann stellen‘ とは，「立派にやっていく」という意味の慣用的言いまわしであって，主語が女性の場合にも用いられ，たとえば「彼女は一人で立派に人生を生き抜いている」は，,*Sie* steht im Leben *seinen Mann.*‘ と言っていた。ところが，これが女権論者ないし男女平等論者たちのお気に召さなくなったのである。,Mann‘（男ないし良人）に由来するものの女性にも用いられる便利至極な不定代名詞 ,man‘ に御不満で，「女性が主語の場合には代りに ,frau‘ (‹ Frau) を使え」という人々の意向を汲んで，,die Frau stehen‘ という表現さえすでに登場しているのである。

もとより，Anwältin, Ärztin, Denkerin, Erfinderin, Philosophin, Politikerin, Richterin, Soldatin などはもはやふつうのドイツ語語彙である。

19) 女権論者たちが，「女性は男性の医者に向っては，羞恥心のためになかなか本当のことを打ち明けられないから，女性を診るのは女性医師のほうがいい」と考えるのに対し，フランツィスカは，「ふつうの感覚を持った女性なら，同性の医師に対してのほうがはるかに羞恥を感じるはず」と主張しているが，この辺になると私の理解の範囲を越える。

なおフランツィスカは，「女性医師」のことを ,ein weiblicher Arzt‘ と――いまでも「女性客」は ,ein weiblicher Gast‘ と言う他ないように――言っているが，前注にも記したとおり，今日ではむろん ,Ärztin‘ ただ一語ですむ。

20) 交通取締りの女性警官が同僚男性よりはるかにきびしいことは周知の事実である。この点で私が想起するのは，サトウ　サンペイさんの「夕日くん」の一場面である（「夕日くん」第7巻，新潮社1985年刊，22)。それは，未来の女性優位社会についての「予感」を扱ったもので，立小便の現場を押えられた万年課長が，「女性には出来ないことをした」という理由で「差別コレ見ヨガシ罪，懲役3年」の刑をくらって服役中，刑務所の中庭で，「美人をボーッとみてただけ」で「美人・ブス差別現行犯」で15年の刑を受け，女性看守にこづかれながら散歩している夕日くんに出会う場面である。

ず……楽に世の中を渡っていくように出来ているのだ」と，ある種の女性が聞いたら柳眉を逆立てそうなことを言う。更に彼女は，「いずれ起こってくるであろう女性解放運動は，性的存在としての女性に自分の肉体を意のままに扱う自由を要求するだろう」とも説く[21)]。

その場合，彼女が推奨する ‚Hetärentum‘ とは，古典古代のそれであり，当時の「ヘテーレ」たちは，高度の教養を備えた，社会的に尊敬される自由な存在で，自分の愛情と肉体とを，自分の好みに従っていつ誰に提供しても非難されることなく，しかも同時に，男性の精神世界への参入も許されていたのである。

これに反し，フランツィスカによれば，キリスト教は，何の根拠もなく，女性は「一夫一婦制 (monogam) に向いている」と勝手にきめつけて，退屈な結婚を強い，性生活を義務とする一方では，結婚生活だけに満足できない男性のためには売春制度を設け，一部の女性に複数男性とのまことに美的ならざる性交渉を強要しているのである。

4. シュヴァービングの〈女王〉

シュヴァービング (Schwabing) は，現在でもミュンヒェン市内の特殊な地域ということになっているが，物の本によると，紀元600年ごろ，ス

21) 極端な女権論者たちは，男女の同権を主張するあまり，その存在を疑うことが出来ない筈の男女の根本的差異にまで眼をつぶろうとしているかのようだ。早い話，立花　隆：「サル学の現在」（平凡社，1991年）によれば，チンパンジーばかりではなく，ニホンザルも，人間の男性に対する警戒心と女性および子供に対するそれとでは全く違うそうであるし，サル —— この場合は屋久島のニホンザル —— のメスは人間の女性とはすぐ相通じあうという（同書60ページ上段および117ページ下段参照）。私は，いまやある意味で自然から逸脱したかに見えるわれわれヒトと違い，いまなお高度に自然を保っているサルが持つこの本能的な「性差感」を重視したいと思う。たとえば，これまた立花　隆：「アメリカ性革命報告」（文春文庫，1984年）にある一部アメリカ人の性行動（ことに101ページ以下に紹介されている ‚fist fucking‘ の話など），鶺鴒（せきれい）ならずとも呆れはてるほどの「自然」からの逸脱行為としか思えない。

ワポ (Swapo) なる人物が当地に移り住んだのに因んで「スワピンガ」(Swapinga) と呼ばれたのが始まりで，文献に最初に登場したのが782年，ミュンヒェンより古いが，1810年になってもまだ人口570人の寒村だった。1887年に「市」に昇格，1891年にミュンヒェン市に編入された。

シュヴァービングが，文学者をも含む藝術家たちが多数たむろする地区としての名声を得たのは前世紀末のことで，その最盛期は1895年から1905年までの10年間だと言われる。

われわれ日本人に馴染みのある名前としては，ヴェーデキント (Franz Wedekind, 1864–1918)，カロッサ (Hans Carossa, 1879–1956)，ゲオルゲ (Stefan George. 1868–1933)，ハルベ (Max Halbe, 1865–1944)，トーマス・マン (Thomas Mann, 1875–1955)，リルケ (Rainer Maria Rilke, 1875–1926) などが挙げられようが[22]，フランツィスカもむろんその一人[23] で，

22) ただしマンは，40年もミュンヒェン暮しをし，一時期，假装ダンス・パーティーを楽しんだこともあったとはいえ（Ⅱ.-(5)，288ページ），その資質から言って，当時のシュヴァービングの狂態には距離を置いていたらしく，短篇「予言者の家にて」(Beim Propheten, 1904) の中では，さる奇妙な集会に参加しているフランツィスカと覚しい女性（1998年6月の南ドイツ新聞 — Süddeutsche Zeitung — の文藝特集ではこの女性をフランツィスカと断定しているが）について，「貴族出の未婚の若い母、これは家を追い出されたとはいうものの，なにひとつ精神的な欲求のない (ohne alle geistigen Ansprüche) 女で，ただひとえに子を生んだからというだけで (allein auf ihrer Mutterschaft) この仲間に参加をゆるされているのだが」と突き放しているし（片山良展訳，新潮社版「トーマス・マン全集」第8巻 — 1971年 — 300ページ），マン夫人 Katia Mann の「私の書かれざる回想録」(Meine ungeschriebenen Memoiren, Frankfurt, 3. Aufl. 1974) の15ページには，「マクス・ハルベ，ヴォルフスケール，レーヴェントロウ伯爵夫人とは面識がありました。でも，3人ともそれほど深いお付合いはありませんでした」とあるだけである。
なお，Ⅱ.-(1)の290ページには，このたった2行のためにマン夫人のこの本を文献の一つに挙げているが，驚くべき完璧主義と言えよう。

23) じじつ，「毎朝リルケから詩が郵便受に届く。いい気分」（1897年2月29日の日記．Ⅰ.-(3)，47ページ）と書くフランツィスカは，当時いろいろな意味で苦境にあったとは言え，〈女王〉気分にひたったこともあっただろう。
なおリルケは，フランツィスカの息子ロルフをとても可愛がり，ロルフの方でも，のちのちまで，リルケは自分の母親に本当に親身に接してくれた数少ない一人だったと感謝している（Ⅱ.-(4)，13～14ページ）。

彼女の人生のもっとも華やかだった時期はこのミュンヒェン時代と言える。

富岡近雄武蔵大学教授の大著「ゲオルゲ全詩集」(郁文堂，1994年刊)末尾の詳細な「ゲオルゲ評伝」には，「世紀転換期のミュンヒェンのシュヴァービングは奇妙なボヘミアンのたむろする街であった」にはじまる，当時のシュヴァービングについてのくわしい記述があり，その様子は，フランツィスカの小説に「活写されている」とも述べられている（同書562ページ)。

ここに言われている小説が，1913年に出た „Herrn Dames Aufzeichnungen oder Begebenheiten aus einem merkwürdigen Stadtteil“ である[24)]。シュヴァービング時代からだいぶ経ってからの著作であるだけに，フランツィスカもかなり醒めた眼で当時を回想しており，往時の自分に対して距離を取っていて，かえって全盛期のシュヴァービングを知るのにもっとも貴重な記録の一つとされている。じじつ，当時の彼女は，かつてのミュンヒェンには飽き飽きしていたようだ[25)]。

しかし，一時期フランツィスカがいかにシュヴァービングにのめり込んでいたかを示すため，ほんの短命に終った雑誌「シュヴァービング通信」(Schwabinger Beobachter) のことに少しだけ触れて置きたい。

この雑誌は，1904年から翌年にかけて，3号まで出して終っており，タ

---

24) 三光長治篇：ミュンヒェン ― 輝ける日々（国書刊行会，1987年刊）の75ページ以下には，この作品の部分訳が「ダーメ氏の手記」として収録されている（訳者は内海　晶氏)。
なお，この訳名中の「ダーメ氏」の原語 ‚Herr Dame‘ について一言して置きたい。ドイツ語の ‚Dame‘ はフランス語の「マダム」，英語の「レディー」に当るであろうから，この小説の中でも，主人公は，いぶかる相手に対してそれが自分の実名(姓)である旨を何度となく説明することを余儀なくされている。主人公にこういうふざけた名前をつけたこと自体，当時のフランツィスカの心の余裕を表していると言えよう。

25) 私自身，ミュンヒェンには何度か足を運んでいるが，シュヴァービング地区を訪れたことはほとんどない。また，私の趣味から言っても，伝え聞く往時の狂態には共感を寄せ得ないから，正直のところ，フランツィスカのシュヴァービング時代を論ずる資格はないと考えている。

イプ印刷で，大きさも各号まちまち，第1号8ページ，第2号5ページ，第3号7ページという，いかにも手作りらしい，極めてささやかなものである。現在まで残っている実物はほとんどなく，それも，保存状態が悪く，あまり人眼に曝すことができないとあって，筆者も，Ⅱ.-(4)の編者シュレーダーが，わずか31ページのこの小冊子中の6ページを費やして紹介している記事と写真を眼にしたのみであるが，ほかに協力者が2人いたとはいえ，主として編集に当り，軽妙な筆でその時々の文壇現象を皮肉ったり風刺したりしたフランツィスカの獅子奮迅ぶりには感心させられる。

なおフランツィスカは，「ダーメ氏の手記」の中でシュヴァービングのことを ‚Wahnmoching‘, シュヴァービング人種のことを ‚Wahnmochinger‘ と呼んでいるが[26]，この単語は，キュッパーの「ドイツ日常語辞典」(Heinz Küpper: Illustrietes Lexikon der deutschen Umgangssprache, 8 Bde. Stuttgart 1982–1984) にも収録され，「シュヴァービングのこと．地名．1900年ごろ，フランツィスカ・ツー・レーヴェントロウ伯爵夫人がミュンヒェン北部の地名フェルト・モッヒング (Feldmoching) から思い付いたもの．当時フェルト・モッヒングは，農村的後進性と上部バイエルン (Oberbayern) 的俗物性の代名詞だった云々」と説明されており（第8巻，通巻3039ページ），この名前がフランツィスカの頭に浮かんだ正確な時期はともかくとして，ほぼこれが今日の定説となっているようだ。‚Wahn‘ はもちろん「狂気」ないし「狂乱」の意味であるから，この名前を思い付いたころのフランツィスカは，おそらく，この「ヴァーン」という表現に含まれる否定的な意味も含め，シュヴァービングに対し，またシュヴァービング時代の自分のいささか浅薄な行動に対しても，ある程度皮肉な，傍観者的態度に移行していたように思われる。

26) 1912年6月12日付アスコーナ (Ascona) 発のヘッセル (Franz Hessel, 1880–1941) あての手紙（Ⅰ.-(4)，495ページ）には，「シュヴァービングのことはこの作品ではヴァーン・モッヒングとなっていますが，——これはブービ（一人息子のロルフのこと）の思い付きです」とある。

現在のミュンヒェンでも，カーニバル (Fasching) の時期ともなれば，假装を入場条件とするダンス・パーティーが各所で催されるが，あの黄金時代のように，一定の変身（変針？）を遂げつつのちそれぞれ大をなした「偉大なシュヴァービング住民たち」(die großen Schwabinger（Ⅱ.-(4)，31ページ）はもはや夢物語りであろう。よくお眼にかかる写真 —— 左端はフィレンツェ風装束の侍童を従えたダンテ＝ゲオルゲ，右端はハープを捧げ持つギリシャの美少年がホメロス＝ヴォルフスケールを先導する図（1904年２月14日．たとえばⅡ.-(5)の72ページ）—— にしても，カーニバルの余興としてならともかく，中心的役割を演じた「宇宙論者」(Kosmiker) とか「途方もない奴たち」(Enorme) とか自称していた連中が，半ば本気で「古代の異教時代」の再興その他を信じ込んでいたとすれば，私などは「粋狂」の一語で片付けたくなってくる。

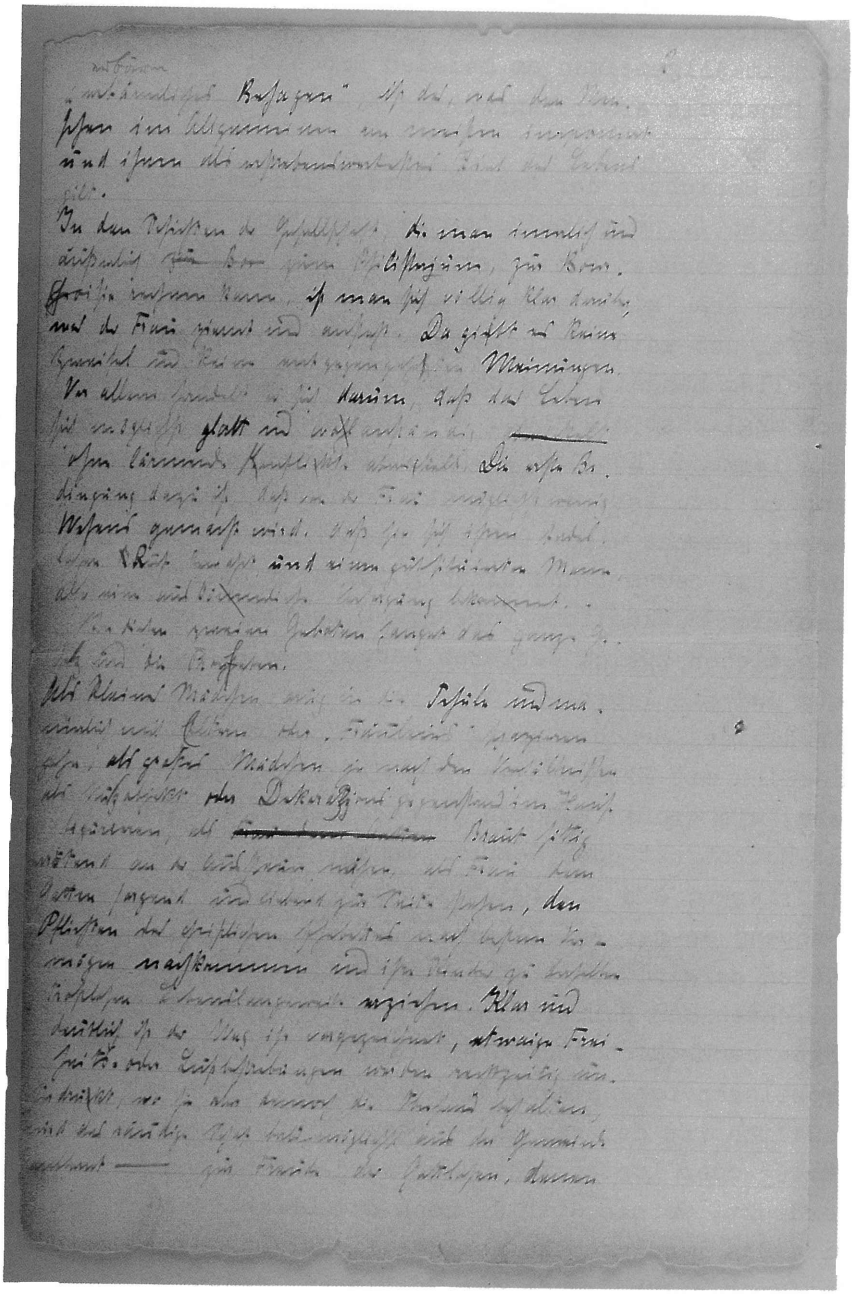
たとえば，ある「バッカス祭」(Bacchusfest) への招待状には次の文言がある：…… ローマの元老院議員，戦士，奴隷，ギリシャ人，エジプト人，アッシリア人，ケルト人，ゲルマン人および北アフリカ人など，古代風コスチューム，それに，ファウン，ニュンフェ，サテュロスその他の神の従者以外の衣裳では絶対に入場できません。道化，ピエロそのほかの近代風衣裳の方はすべて入場を拒否します。現代風社交服の淑女・紳士諸君は，年齢の如何を問わず，10マルク払って假面を買っていただきます」（Ⅱ.-(5)，295ページ）。

彼女は，道徳など糞くらえとばかりその場に残り，
彼女の守護天使はすたこらさっさ，
ホールでは今や，例の乱痴気さわぎのはじまり，はじまり。

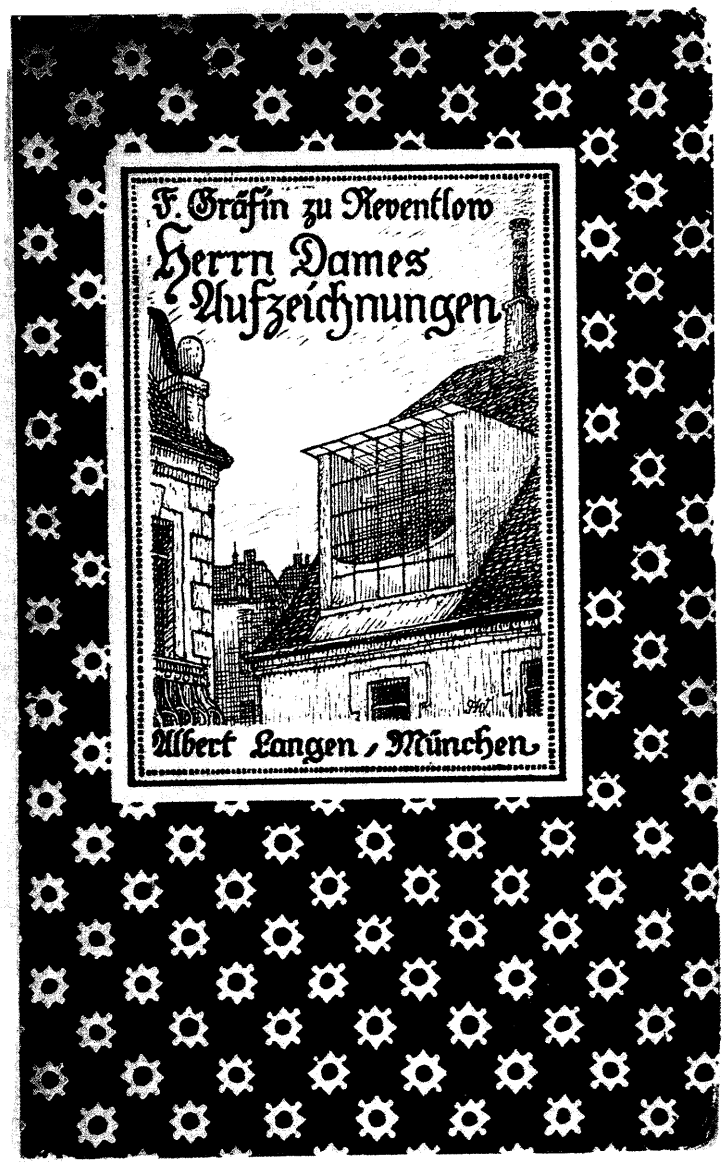
ワンステップのたびに，
野蛮な自然の本能が高まり，

"erbärmliches Behagen", ist das, was dem Menschen im Allgemeinen am meisten imponirt und ihnen als erstrebenswertes Ziel des Lebens gilt.
In den Schichten der Gesellschaft, die man innerlich und äußerlich ... zum Philisterjum, zur Bourschoisie rechnen kann, ist man völlig klar darüber, was der Frau ziemt und ansteht. Da gibt es keine Zweifel und keine entgegengesetzten Meinungen.
Vor allem handelt es sich darum, daß das Leben sich möglichst glatt und ... anständig ... ohne lärmende Konflikte abwickelt. Die erste Bedingung dazu ist, daß von der Frau möglichst wenig Wesens gemacht wird. Daß sie sich ihren tadellosen Ruf bewahrt und einen gutsituierten Mann, also eine auskömliche Versorgung bekomt.
- In diesen zweien Gebieten hanget das ganze Gesetz und die Profeten.
Als kleines Mädchen artig in die Schule und manierlich mit Eltern oder "Fräuleins" spazieren gehn, als großes Mädchen ja nach Verhältnissen als Nutzobjekt oder Dekorazjionsgegenstand im Hause figurieren, als ... Braut sittig errötend an der Aussteuer nähen, als Frau dem Gatten sorgend und liebend zur Seite stehen, den Pflichten des christlichen Ehebettes nach bestem Vermögen nachkommen und ihre Kinder zu derselben trostlosen Lebenslangeweile erziehen. Klar und deutlich ist der Weg ihr vorgezeichnet, etwaige Freiheits= oder Lustbestrebungen werden rechtzeitig unterdrükt, wo sie aber dennoch die Oberhand behalten, wird das räudige Schaf baldmöglichst aus der Gemeinde entfernt - zur Freude der Gottlosen, denen

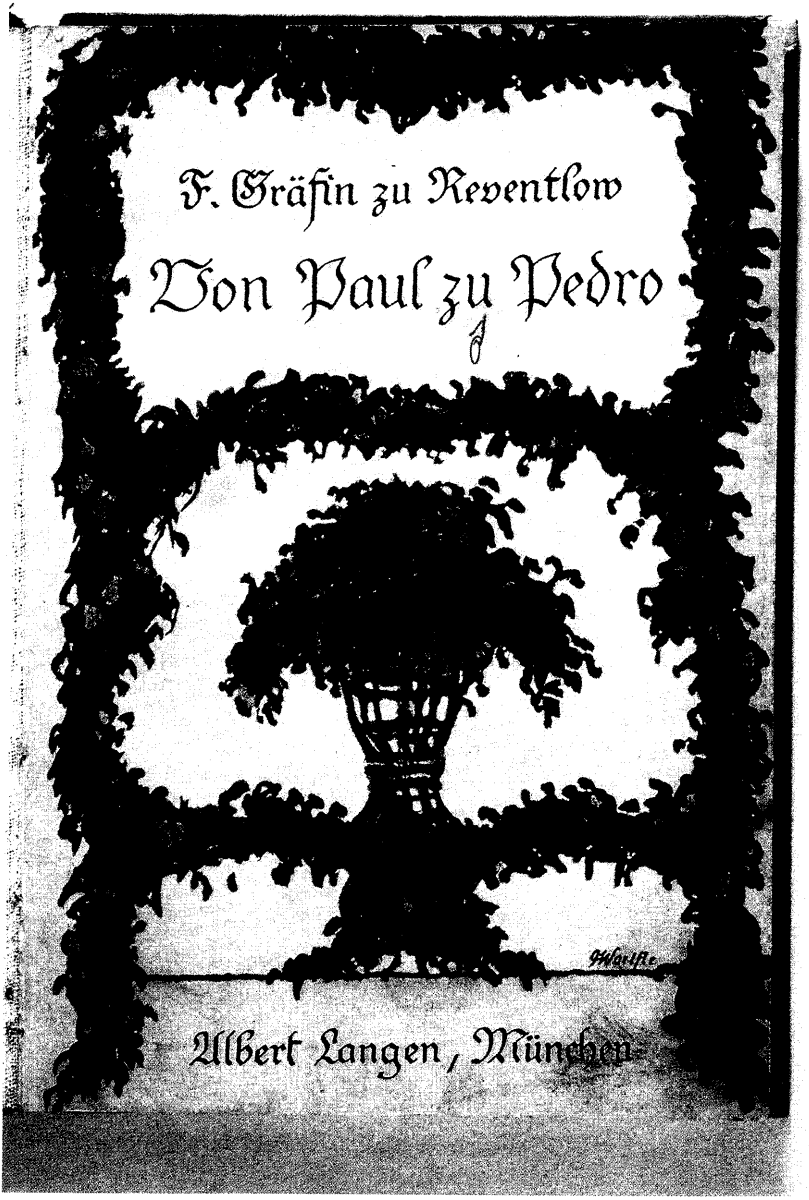
(2) (1)をタイプしたもの。…はフランツィスカが消した部分を示す。



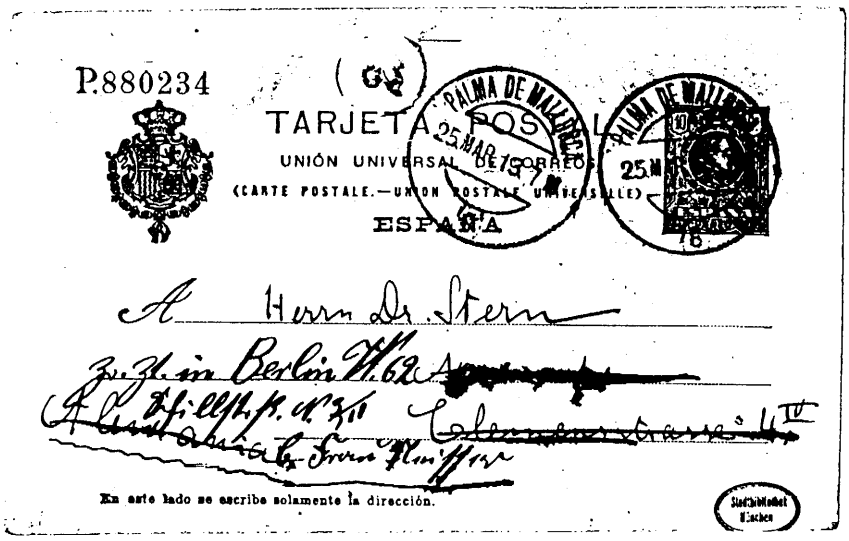
(1) ‚Viragines oder Hetären ?' の原稿（ミュンヒェン市立図書館蔵．16葉中の２枚目）。



(3) ミュンヒェン市立美術館提供のフィルムから複製
(縮尺は約 4/5)。



(4)　ミュンヒェン市立美術館提供のフィルムから複製
（縮尺は約 4/5）。



(5) シュテルンあて1913年３月25日付の手紙の表てがき
（Ⅰ.－(4)の558ページ）。

Liebe Frau, ich bin Schreibfaul
und möchte doch gern schreiben –
wie macht man das? Ich
bin nach einigem Schwanken
Chinesen wieder sehr fest hier
zu sein. Man ist eben gleich
wieder da, als ob nichts dazwi-
gefallen sei. Halb die Hand
umdrehen ein Haus und einige
Karbstriche. Nur als wir eine
Qual eine Wohnung zu haben,
nun hier ist er ein Vergnügen.
Ich weiss nicht wie das Rauchen
Ihnen wird, ich Ihnen schreiben, das
Mallorca der einzige Rückzugsaufen-
halt für Sie wäre, aber an Italien
ist Locarno dagegen ein Waisenknabe.
Zu Fuss kann man überhaupt nicht
mehr in die Stadt gehen, sondern
wartet geduldig auf den Maultiertram.
Zum Wirten kann man so nur, als
ob er nie ging, jetzt merke ich das
er doch manchmal geht.
Im Leben Sie recht wohl u.
schreiben Sie einmal. Grüsse
Ihr Ihren Kappelisch und viele
tausend Grüsse Ihre FR.

Calle Dos de Mayo 6

(6) シュテルンあて1913年３月25日付の手紙（Ⅰ.-(4)の558ページ)。

Lieber Stern, ich bin schreibfaul und möchte doch gerne schreiben - wie macht man das? Ich bin nach einigem Schmerz um München wieder sehr froh hier zu sein. Man war eben gleich wieder da, als ob nichts vorgefallen sei, hatte im Handumdrehen ein Haus und einige Korbstühle. Ueberall ist es eine Qual eine Wohnung zu haben, nur hier ist es ein Vergnügen. Ich weiss nicht wie das kommt. Gerne würde ich Ihnen schreiben, dass Mallorca der einzige Frühlingsaufenthalt für Sie wäre, aber an Staub ist Locarno dagegen ein Waisenknabe. Zu Fuss kan man überhaupt nicht mehr in die Stadt gehen, sondern wartet gelassen auf den Maultiertram. Im Winter kam mir so vor, als ob er nie ginge, jetzt merke ich dass er doch manchmal geht.
Nun leben Sie recht wohl und schreiben Sie einmal, grüssen Sie Ihren Kaffeetisch und viele herzl. Grüsse Ihre FR.
Calle Dos de Mayo 6

(7) (6)をタイプしたもの。解讀にはカピッツァ氏を煩わしたが，さしたる内容ではないのであえて訳文は付さなかった。

(8) 参考文献(4)の表紙の一部。フランツィスカとロルフ。

(9) よく見られる München-Schwabing の Kaulbachstraße 63番地にあったいわゆる ‚Eckhaus‘（ただし文字どおりの角家ではない）でのフランツィスカ。彼女は一時期この家でヘッセルおよびポーランド生まれのガラス絵作家 Bodan von Suchocki（通称 Such）と同棲していた。なおこの写真はレンプ氏から頂載したもののコピー。

足は舞い，スカートも舞う。
そして，青年どもはすべて，好色漢に変身する。

ダンスには，技巧など皆目不要，
色気狂いになって，ぐるぐる廻り，
憑かれたように，わめき，足を踏み鳴らすだけ。
そして，笑い，吼え，汗を飛ばし，湯気を立てるのだ。

甘美な無垢の時代よ，ハイさようなら。
それに，アルコールの酔いが加わる。
われらがコンスタンティーンよ[27]，お前は目的を達した，
彼女はもう駄目だ，どこへでも連れて行くがいい[28]。

といった風で，Ⅱ.-(5)の298ページ以下には，当時のそうしたお祭り騒ぎのいかがわしい写真がたくさん紹介されており，そこでどういうことが行われたかは，思い半ばにすぎるものがある。

5. 母として

私が知る限り，フランツィスカは，3回妊娠している。

第一回目は，ハンブルクの真面目な法律家の卵リュプケ (Walter Lübke) との結婚期間中で[29]，流産に終ったが，第2回目の妊娠で生れたのがただ

27) Konstantin はラテン語起源の男性名で，「毅然とした男」の意味を持つが，作者がどういう意図でここにこの名前の男を持出したかは，残念ながら筆者には不明である。

28) これは，「マリー」(D'Marie) と題するトーマ (Ludwig Thoma, 1867–1921) の詩（1908年）の一部であるが，ここでは，Ⅱ.-(5)の297ページから孫引きした。

29) 結婚の日付は1894年5月22日，離婚が成立したのは1897年である（Ⅰ.-(3)，28ページの編者注参照)。彼は，ごくまともな常識人だったうえ，心も広く，フランツィスカの切なる希望により，彼女を，画家修業のため1年間のミュ

一人の息子となったロルフ (Rolf) ― 通称ブービ (Bubi) ―，第三回目は1904年，思いも掛けぬ双児の女の子だったが，７ケ月の早産で，一人は死産，辛うじて生まれた二人目も翌日には死んだ[30]。

フランツィスカが２度目の妊娠を知ったのは1897年１月であるが，それ以降，相変らず病気と貧困に苦しみながら[31]，また，うまく出産できるかどうかの不安を抱きつつも，「子供の父である男と結婚すべきだ」という良人リュプケのすすめは，「馬鹿げたこと」と一蹴して、ひたすら出産を待ちわびる。

はじめて胎動を感じたといっては驚喜し，準備万端をととのえて待つうち，９月１日，ロルフが生まれる。

ロルフが生まれてからのフランツィスカの日記は，喜びと満足の記述にみちており，親馬鹿という他ない。ただ彼女がふつうの女性と違っているのは，「この子は私だけのもので，父親は無関係だ」として，行きずりのごくつまらない男だったという[32] その父親の名前をついに明さずに終っ

ンヒェン留学に送り出しさえした。彼女の妊娠は，もとより別の男との間のことで，その他の理由もあったのだろう，離婚に踏み切った。フランツィスカが必死になって復縁を求めた時期もあったが，リュプケのこの決断は，彼にとっては正解だったというべきであろう。

30) 彼女は当時，北イタリアの Forte del Marmi 近くに滞在しており，Ⅱ.-(5) の 91 ページには，同地近くでとった妊娠姿のフランツィスカの写真が載っている。
なお，同年９月末から10月はじめにかけての日記には，産前の肉体的苦痛，一時に２人の娘を失った悲しみ，飲んでくれるべき赤児がいないのに張ってくる乳などのことが，なまなましく描かれている（Ⅰ.-(3)，300～309ページ)。

31) たとえば，時期は前後するが，1895年７月15日の日記（前掲書 63ページ）には，「毎日，８時間ないし10時間，原稿を書いている」とあるが，これは，翻訳原稿のことで，彼女は，少女時代から習っていたフランス語が特に堪能で，アナトール・フランス，モーパッサン，マルセル・プレヴォー，ゾラなど，多数の翻訳をものしているが，大した稼ぎにはならなかったようだ。
また，彼女のフランス語の知識は必ずしも正確ではなく，その翻訳には誤りがたくさんあったと言われており，彼女自身も，「自分の翻訳はかなりいい加減で，場合によつてはところどころ勝手にすっ飛ばした」と正直に告白してもいる（たとえばフラーゲス宛1901年11月13日ごろの手紙．Ⅰ.-(4)，358ページ)。

た[33] 点である。

Ⅱ.-(2)の著者フリッツは，この本の終りの方（117-123ページ）に「ロルフ・レーヴェントロウ語る」(Rolf Reventlow erzählt) という章を設け，1978年の夏，当時すでに82歳だったロルフにインタービューした時のことを記録しているが，その中でロルフは，「あなたは時には過剰な母上の愛情を負担に感じたことはありませんでしたか？」という問いに対して，「そうですね，私はあの母の息子だったわけで，母親がその息子を熱愛して (vergöttern) くれたというだけの，至って単純な話ですよ」と答えている。あれほどの愛情をそそいでくれた母親についての感想としては素っ気なさすぎる気もするが，これが正直な息子の感想であろう[34]。

---

32) Ⅰ.-(2)末尾（519ページ）のラッシュ (Wolfdietrich Rasch) の「あとがき」参照。そこには，「彼女とロルフの父親との結びつきは，単なる一時の火遊びにすぎなかった」とある。

33) これが通説である（たとえばⅡ.-(4)），6ページ）。しかし，生前のロルフに2度会っているレンプ (Richard Lemp, 1917-) さんは，次のような話を伝えている：「2度目の自宅訪問のさい，辞去しようとして，何気なく，近く休暇でニーダー・エステルライヒ（Niederösterreich — 東部オーストリアの州の名）のバート・ドィッチュ - アルテンブルク (Bad Deutsch–Altenburg) へ行くつもりだと告げたところ，「それなら，ぜひ墓地を訪ねて下さい。入ってすぐの塀ぞいに黒い墓石があり，オーストリア社会党 (S. P. Ö) のシンボルのナデシコが刻んでありますが，それが私の父の墓です。私も，子供の頃はよく行ったものです」と言った（同氏の1985年5月15日付記録）。22年来同氏の知遇を得，その誠実な人柄を知っている私は，このレンプ氏の説のほうを信ずるものである。

34) 一体にロルフは素直な人柄だったらしく，「母が書いたものがすべて印刷に価するとは思いません。„Der Geldkomplex“ は読んでとても面白いし，„Herrn Dames Aufzeichnungen“ もそうです。でも，詩その他になると，私にはちっとも興味が湧きません」と，正直な感想を述べている。また，「母上が亡くなったあと，遺稿の世話や作品の出版にまるで無関心な態度をお取りになり，万事奥様のエルゼさんに任せてしまわれたのはなぜですか？」という問いに対しては，「それは，そういう仕事が私に向いていなかったのと，エルゼがものすごく熱心にその仕事に没頭したからです。それに，エルザには，母の字が読めるという，素晴らしい才能があるのです。そんなことが出来る人って，滅多にいないのですよ」と答えている。
しじつ，本稿に添付したいくつかの図版からもお分りのように，フランツィスカの筆蹟は相当に読みにくい，Ⅱ.-(2)の18ページには，リルケ宛フランツィスカの手紙のコピーが載っているが，リルケはそれを自分の妻に転送するに当って，読みにくい箇所に自筆で読み易いよう加筆しているほどである。

このロルフに対するフランツィスカの愛は終生かわらなかったが，それが高じて彼女は，第一次世界大戦に際してある突飛な行動に出る。

兵役を免れさせるべくロルフにスイス国籍を取らせようという試みに失敗した彼女は[35]，彼を兵営から奪取して中立国スイスに連れ込むという，大胆不敵な作戦に出て，しかもまんまとそれに成功するのである。

この事件については，シュレーダーが，雑誌「Tagebuch」に載ったオルデン (Balder Olden, 1882–1949) の報告を引用しており（Ⅱ.-(4)，17ページ)，筆者も，ここではそれをそのまま孫引きさせてもらうことにする[36]：

「彼女が ‚神の恵みの子‘ (Götterkind) と呼びならわし，彼女のこれまでの全人生の中心だった子供，彼女が自分ただ一人のもので，父親が誰かもいっさい公表して来なかったこの子供が，兵士になっていた。彼女は，彼を自分の膝下に連れ戻したうえ，〔ボーデン湖畔の〕コンスタンツで手漕ぎのボートに載せ，みずから必死でオールを操り，何隻もの警備艇からの銃撃を受けつつ，その穴だらけになった小舟で息子を無事スイス側の岸に連れ込んだのだ[37]。世界中の新聞は，こぞってこの一人の母親の比類のな

ついでに言えば，トーマス・マンの自筆もかなり読みにくかったようで，長女 Erika Mann の „Mein Vater, der Zauberer“ (Rowohlt Verlag 1996) によれば，彼の原稿をタイプに打ち直すのは，それをすらすら読める唯一の人物である Katia 夫人だけだったという（同書259ページ)。

35) 1914年２月のアスコーナ発シュテルン（Paul Stern. 1933年，ナチスによる迫害を恐れて自殺）宛の書簡（Ⅰ.-(4)，563ページ）には，「17歳未満ならドイツ国籍を離脱することは難かしくないという情報が入りましたので，兵役を脱れるため，ブービをスイス人に仕立てることにきめました。たぶんうまくいくと思います。そうなれば，銀行破綻の件（これについては後述）で受けた打撃も，かなり修復されるというものです」とある。

36) Ⅱ.-(1)の278ページには，Nr. 150 として，オルデンが1926年この雑誌に寄せた「アクロバット人生」(Ein Leben in Purzelbäumen) という３ページほどの文章が挙っているが，発表年代から言って，これがいま筆者が問題にしている文章と同一か否かについては多少の疑問が残る。

37) 周知のように，「ドイツの海」と称せられるこのボーデン湖 (der Bodensee) は，ドイツ，スイスおよびオーストリアの３国に囲まれている。なおこの湖は，表面積は538平方キロで琵琶湖（674平方キロ）の約80パーセントである

い行動を，世間の風潮に流されることのなかったヨーロッパ中でただ一人の母親――ひたすら母親たることに徹し，いかなる国にもいかなる家族にも所属することを拒否した母親――のこの行為で持ち切りだった。全世界に打電された馬鹿げたインタービューを通じて世間は，この伯爵夫人を，協商国側寄りの女性，政治的に色の付いた女優に仕立て上げようとしたが，彼女のこの行為には，政治的動機は微塵もない。そんなことは夢にも思ったことはなく，……彼女は，ひたすら母親だったのだ。彼女を見ていると，すべての母親が彼女ほど母親に徹していたら，この地上から戦争なんぞ一切消えてなくなるのではないかと思われるほどである」。

さきに触れたインタービューでも，ロルフは，「母は，非政治的な人間でした。戦争のことにしても，息子を自分の手から奪うかも知れない脅威として受けとめていただけの話です。軍国主義は徹底的に嫌っており，衛兵交替を見ただけでも笑いが止まらないような女でしたが，戦争に反対だったのも，自分の息子が戦場に出るのに反対というのが主な理由でした。彼女はまったく非政治的な人間でしたが，それは，彼女が非常に個人主義的な人生観を持っていたからで，彼女の人生観を言いあらわす言葉としては，‚無政府主義的な個人主義‘ というのがふさわしかったと思います」と述べている。

たしかにフランツィスカは，理論家タイプの人間ではなかった。しかしその代り，こうと思ったら自分一人ででもすぐそれを実行に移すタイプの女性だった。だから，この果敢な息子救出作戦にも，政治的動機は一切なかったはずである。しかし，すべての母親が彼女を真似ても，オルデンの言うようには，この地上から一切の戦争が姿を消すことにはならないだろう。また，そういうことなど一切考えずに自分の思いのまま行動したところが，いかにもフランツィスカらしい。

が，最深部は252メートルもあって，琵琶湖の96メートルをはるかに超えている。

戦争は広義の政治の中に含まれると思うが，政治は，すぐれて男性的な行動領域の一つである。政治は，非情な世界，汚ない世界である。それは，「結果」が物を言う，「勝てば官軍」の世界で，人を騙しても，「騙された方が馬鹿だ」ですみかねない世界である。チャーチル元英国首相は，ドイツ空軍によるロンドンのある地域の爆撃計画についての情報を入手しながら，自国の諜報網の能力がドイツ側に知れるのを恐れて，地域の住民が多大の被害を蒙るであろうことを知りつつ，その情報を住民に伝えるのをストップさせたというし，かのノルマンディー再上陸作戦に際し，連合軍の最高司令官だったアイゼンハウアーは，戦線が入り乱れ，味方の兵士にも死傷者が出ることは承知しつつ，あえてその地域の絨毯爆撃を命じたと伝えられる。サッチャー元英国首相のような例外はあるにしても[38]，政治はやはり基本的には男性の営みだと思っている私は，今回のフランツィスカの行動を「女性性」の極致だと思うとともに，その限界をも考えざるを得ない[39]。

6. 最後のアクロバット

フランツィスカは，1871年の生まれで1918年に47歳で死亡しているから，1911年と言えば，まだ40歳とはいえ，すでに晩年と言ってよいが，このとき彼女は，生涯最後の，いかにも彼女らしい奇抜な行動に出た。この

38) サッチャー氏の政策についてはいろいろ批判もあるようだが，私は，例えばフォークランド紛争時における彼女の対処は見事だったし，まさに「男性的」だったと思う。

39) 私が私家版「続ひとくぎり」(1994年) で，フランツィスカを「女性のエロスの権現」と呼んだ（76ページ）ゆえんである。シュレーダーも，彼女を「女性の極致と言える (allerweiblichst) 女性」と呼んでいる（Ⅱ.-(4)，17ページ)。
もちろん，「女性的なるもの」は多義的であるから，フランツィスカ型女性がその唯一の典型だというわけではない。たとえば，私がもっとも尊敬するドイツ女性の一人エファ・レッシング (Eva Lessing, 1736–1778) も「女性の極致と言える女性」の一人だったと思うし，ファウストを天上界に引上げたグレートヒェンも，もとよりこの範疇に属するであろう。

話を彼女に紹介したのは，かねて彼女と親しかった無政府主義者のミューザーム[40]である。

この事件の経過については，1910年秋から翌1911年の9月にわたる，シュテルン，ヘッセルおよびキッツィンガー夫妻 (Friedrich und Friedel Kitzinger) あての，ロカルノ近郊アスコーナ（スイス）からの手紙に詳しいので，主としてこれらの書簡を参考にしつつその概要を述べたい。

そもそもこの話が彼女のところに持ち込まれたのは，フランツィスカがアスコーナに移るまえのミュンヒェン時代であるが，パリはモンマルトルのさるカフェでミューザームが彼女に持ち出した話というのは，「零落したさるバルト出身の男爵 (Freiherr Alexander von Rechenberg–Linder) と偽装結婚 (Scheinehe) をしないか？　すでに78歳になっている彼の父親は，この放蕩息子を廃嫡することにしていたが，しかるべき結婚を条件に遺産を譲るつもりなので，本人はそういう女性が見付かれば，自分がもらう財産の半分はその女性に譲る」というものだった。ミューザームによると，この話を聞かされたフランツィスカは，最初はびっくりしたものの，しばらく考えたあと，承諾の意向をもらし，いかにも彼女らしく，「レッヒェンベルクという名前はとても経済的ね。だって，ハンカチの頭文字 (R) の刺繍を変えなくてすみますもの」と言ったという。「いまでは，私たち2人の意見は完全に一致し，ロカルノに滞在中の彼氏の父親も私に満足しています。…… 私の婚約者は，海賊みたいな風貌で，ロシアの船員風の服を着て，酒びたりでいますが …… 反面，とても紳士的で，可愛げがあります …… むろん結婚といっても偽装にすぎませんが …… 彼は，今からもう本気で，自分がもらう遺産の半分を私に譲るつもりになっていて，その額は，夢のようなというほどではないものの …… 私にとってはまあ相

40) 彼は，何度か投獄されたのち，1933年2月28日のいわゆる「国会議事堂炎上事件」のあと逮捕され，一年余にわたる拷問のすえ殺された。なお彼は，フランツィスカをもっとも高く評価した男性の一人である。

当のものです。それに彼は，ブービを自分の養子にすると言ってくれています。この件は，彼の父親の存命中はさしあたり何のプラスにもなりませんが，それまでだって，同棲などということはいっさい無いのですし，彼氏の面倒を見る必要も全然ありませんから，別段マイナスではないし……少なくとも，ブービもいつかはある程度の財産家になれそうだというのは，とてもいい話です」「私たちが正式の結婚に漕ぎつける前に父親が ‚くたばる‘ (abkratzen)ようなことがあっては最悪の事態ですから，二人とも結婚を大いに急いでいるのです……老父はこの件をとても喜んでいるらしいのですが，それというのも，私と結婚してしまえば，息子がまた飛んでもない相手に引っかかる心配がなくなるからで —— というのも，彼氏は，まえに一度イタリア人のウェートレスと結婚したことがあって，そのとき周囲の人たちは，その結婚を解消するのにずいぶん手こずったからです」「私あての手紙の宛名は，ロカルノ近郊アスコーナで十分です。レッヒェンベルクと結婚することになって，私はここでは超有名人なのですもの……これでたぶん一切の手続きは完了ということになるでしょう……私は未来の舅をうまく籠絡して，息子の借金を払ってもらいました……この父親が彼をもう一度廃嫡するなんてことになったら，眼も当てられませんわ。彼の酒びたりがぶり返していらい，二人は絶えず喧嘩しています」「いろいろ障害はありましたが，いまは事態もかなり進捗し，私たちの書類を各地の領事館で認証してもらうだけというところまで漕ぎつけました。そして，ロンコ（Ronco. アスコーナの南西５キロほどの，小高い岡の上にある寒村）の村長さんは，大骨を折って私たちの ‚結婚公示書‘ (Eheverkündigung) を作成しました。むろん内容はすべて出鱈目で，私の両親はミュンヒェン生まれ，彼氏と私の職業はそれぞれ男爵と伯爵夫人となっています —— これまで，自分の職業なんて気にも留めていませんでしたのに」「この件すべてを通じて，私がいちばん気に入っているのは舅です……私の未来のハズの借金のことで舅と談判するなんて，あまりぞ

っとしない役割でしたが，彼氏がそうしてくれと言うし，２人に任せておいたのではまるで埒があきません。最初に舅が出した条件は，良人が，新婚期間中か少なくとも数ケ月はアル中専門の病院に入院すると約束するなら借金を払ってやるというものでした……あり体に白状すると，私は100パーセント舅の味方で，その点，ハズが耳の悪いのをかなりうまく利用しました……本当に，結婚って，じつにいろいろ面倒なものですわね」

こういう条件の男と，こういう状況下で，なおかつ結婚の意思を持ちつづけたこと，しかも，事態を楽しむ余暇さえ持っていたらしいこと――これだけを見ても，フランツィスカが尋常な神経の持主ではなかったことが知れよう。

かくて２人は，ようやく挙式に漕ぎつける（ミュンヒェン市立図書館蔵の結婚契約書の日付は1911年５月16日となっている）。舅以下が黒の正装をしているのに，新郎新婦だけはまるでテニスの試合に出るような明色の夏服という珍妙な結婚式。長々とつづく鹿爪らしい牧師のお説教に，２人はほとんど笑いを押えかねる。式後に新郎は，「まるで絞首刑に処せられるような気分だった」と洩らす。

ところが，フランツィスカを待ち受けていたのは，思いも寄らぬどんでん返しだった。

1914年春のキッツィンガー夫妻宛の手紙には次のように述べられている：「昨年12月のはじめ，待ちに待った遺産が届きました――そこで，債券をロシアで (die Obligationen in Rußland)[41] 売ってくれるよう依頼し，その代金を担保にロカルノの銀行で前借りして，一寸した豪華旅行に出かけ，旅行中に到着しているはずの残金を引出すつもりで帰ってみると，その瞬間，銀行が倒産したのです……」

若くして故郷を離れていらい，ドイツ語で ‚von der Hand in den Mund leben‘（手から口への生活をする）というその日暮し，いやそれ以上に貧

41） この文言は，「債券をロシアで」とも「ロシアの債券を」とも解釈できる。

しい生活をし，時には怪しげな稼ぎにも手を染め，アクロバット的な金策に走りまわってきたフランツィスカ，預金する余裕など一度もなかった彼女が，生涯で唯一度，若干のまとまった金を掴んでそれを銀行に預けた――それがこの始末である。

しかし，その時の彼女の態度がまことにいさぎよい。さきに引用したキッツィンガー夫妻あての手紙の末尾に言う：「それ以外は万事うまくいき，健全かつ御機嫌ですごしています。一時の栄華はとても素敵だったし，破産の件にしても，本当のところはとても愉快な事件でした。……要するに，‚エホバ与え，エホバ奪い給う，エホバの御名は讃むべきかな‘（旧約聖書：ヨブ記第Ⅰ章21節）だったって訳よね！」

セーケイ[42]はⅡ.-(1)，187ページの下注で，「フランツィスカは，毎晩ロカルノのクーア・ハウスのサロンに，黒服の貴婦人姿で，カジノのルーレット台に立ち，冷たい落着いた表情でチップを置く姿が目撃された――一部の人たちは，あの女は金に困っているのだと囁きかわしていたし，経営者側から囮(おとり)に傭われているのだと譯知り顔に言う人たちもいた。それに対して彼女は，‚お金からはこれっぽっちもいいことなんか生まれませんよ，あっても無くてもね‘と，まるでデルフォイの巫女(みこ)のように答えていた」というさる証言を伝えているし，「フランツィスカは金銭欲の強い女性だった」とする意見もあるらしいが，派手に遊ぶことを好み贅沢好きだった彼女がお金を必要としていたことは事実にしても，私は，彼女は本質的には「お金なんぞ糞くらえ」の意気で生きていた女性のように思う。この点で私は，一人息子のロルフがフリッツに語った，「典型的なのは母とお金の関係です。母には妙な癖があって，原稿料その他，どこからにせよお金が入ると，それを当時はまだ流通していた10マルク金貨に換えて家中のあちこちにばらまいて置き，あとでお金に困ったさい，家の隅っこのどこかでそれを見付けては喜んでいました……小麦粉１キ

42) このハンガリー系の名前の假名表記についても筆者に自信はない。

ロが幾らするとか，馬鈴薯の値段が上ったとか下ったとかいうことも，後年，死ぬ直前になってやっと凡そのことが呑込めるようになっていました……」という証言を信じたい。

最晩年になっても文筆活動に意欲を燃していたフランツィスカは，その後も，「マネー・コンプレックス」(Der Geldkomplex, 1916年）と，「短篇集 — ペンション揺れる地球儀荘ほか」(Das Logierhaus zur schwankenden Weltkugel und andere Novellen, 1917) を出しているが，ミュンヒェンの老舗(しにせ)古書店ローベルト・ヴェルフレ (Robert Wölfle) の老店主ヴェルフレ夫人からこのほど贈られたこの「短篇集」末尾の広告を見ると，1917年の時点で，„Ellen Olestjerne“ が第3版（假装本3マルク50ペニヒ，並装本5マルク50ペニヒ），„Von Paul zu Pedro“ が第3版（假装本2マルク，並装本3マルク50ペニヒ），„Herrn Dames Aufzeichnungen“ が第3版（假装本2マルク50ペニヒ，並装本4マルク），„Der Geldkomplex“ は第4版（假装本2マルク50ペニヒ，並装本4マルク）とあるから，彼女の著作は，その生前にもある程度は売れており，従って，この方面からの収入も多少はあった筈である[43]。

1918年7月27日に47歳で死去したフランツィスカの死因およびその経過についてはさまざまのヴァージョンがあるらしいが[44]，ここでは，エルゼ・レーヴェントロウがその編集にかかる「日記」の冒頭に置いた「略伝」中の言葉を引用するにとどめる[45]：「彼女の死そのものは，完全な孤独のうちに，非常な苦痛を伴う形を取った。彼女は質(たち)の悪い宿痾に倒れたのであって，テシーン（Tessin. スイス南部の州）の山奥にある小邑ロッコロ (Roccolo) から〔ロカルノの北東2キロ足らずの〕ムラルト (Muralto) に運び込まれた時にはもう手の施しようがなかった。彼女は，ふた

43) なお，フランツィスカの死後のことになるが，彼女の作品は，第三帝国時代には禁書となっていた。
44) Ⅱ.-(2)，158ページ参照。
45) Ⅰ.-(3)，22ページ以下。

たび意識を取り戻すことも，彼女がこの地上でもっとも愛していた息子に別れを告げることも出来ないまま，1918年7月27日の夜，この世を去った」。

47歳でのフランツィスカのこの死をどう受けとめるか？

このいささか早い死によってフランツィスカは，「彼女には考えられもしない老齢という恐るべき事態を免れたのだ」とは前掲書でエルゼ・レーヴェントロウが述べるところである（22ページ)。「彼女はいい時に (zur rechten Zeit) 死んだ」というある人の評をうべなった[46] かつての恋人クラーゲス —— おそらくもっとも深くフランツィスカを愛した男であるクラーゲス —— のコメント[47] …… これも美人の宿命というべきか。

ロカルノにあるフランツィスカの墓には，ただ ‚Contesse FRANCESCA REVENTLOW 1871–1918‘ とのみ刻まれている。

〔参 照 文 献〕

I. 著　作

(1) Romane (Von Paul zu Pedro; Herrn Dames Aufzeichnungen; Der Geldkomplex; Der Selbstmordverein). Else Reventlow 編. München/Wien 1976

(2) Autobiographisches (Ellen Olestjerne; Novellen; Schriften; Selbstzeugnisse). Else Reventlow 編. München/ Wien 1980

(3) Tagebücher (1895–1910): Else Reventlow 編. Frankfurt 1971 (Fischer Taschenbuch 1702)

(4) Briefe (1890–1917): Else Reventlow 編. Frankfurt 1977 (Fischer Taschenbuch 1794)

（著作の中に「日記」と「書簡」を含めるのは異様に思われるかも知れないが，参考文献(8)の彼女の項（第9巻406ページ以下）の冒頭にも ‚Erzählerin, Verfasserin von Briefen und Tagebüchern‘ と紹介されているほどで，フランツィスカの書き残したものの中で「日記」および「書簡」の占める位置は高く，かつ分量も多い(ポケット版とはいえ，それぞれ約600ページあるし，未発見または未公刊のものを加えればそれはさらにふくらむであろう)。それに，質の点からもこの二

46), 47)　II.-(2)，158ページ。

つは非常に重要である。本文中でも少し触れたように，彼女のいわゆる作品についての評価は分れているのに反し，「日記」と「書簡」とは，文体・内容ともにすぐれているばかりでなく，フランツィスカの生涯を論ずる場合に不可欠の資料であることは衆目の一致するところである。

ただし，私が利用した上記の4点についてはいささか不満がある。まず(1)と(2)は，ハードカバーであるにもかかわらず，紙質が悪いためか，ページ数（ともに528ページ）の割には部厚く仕上っていて扱いにくく，目次の構成もお粗末で，利用に不便である。

それに，これまた本文中で触れた，読みにくさでは定評のあるフランツィスカの手書き原稿のせいであろう，読み間違いや誤植がかなり多い。たとえば，②の470ページ，„Viragines oder Hetären?“ 中の一語が，正しくは ‚Kern‘ とあるべきところ，どうしたものか ‚Verkehr‘ となっており，下記の「参考文献」(4)中のファクシミリ版と照合してようやく原意に辿りついたようなこともあった。

ついでに述べておくと，本年（1998年）5月ミュンヒェンの展覧会（後述）で見たデル・ボンディオ - レーヴェントロウ夫人出品の „Von Paul zu Pedro“, „Herrn Dames Aufzeichnungen“ および „Der Geldkomplex“ の初版本は，当時の爛熟文化を反映してもいるのであろう，惚れ惚れするほどの美しさだった。あとがきにも述べたとおり，うち二点のカラー写真をこの小文に添えることができたのはまことに幸いであった。

なお，作品集・日記および書簡すべての編者でありフランツィスカの義理の娘――つまり一人息子ロルフの夫人――エルゼ・レーヴェントロウは，1984年9月13日，87歳でミュンヒェンで死去したが，故人の希望により，遺体（遺骨？）は水葬 (Seebestattung) に付された。）

Ⅱ．参考文献

(1) Johannes Székely : Franziska Gräfin zu Reventlow – Leben und Werk, mit einer Bibliograpnie, Bonn 1979

(2) Helmut Fritz : Die erotische Rebellion. Das Leben der Franziska Gräfin zu Reventlow, Frankfurt 1980 (Fischer Taschenbuch 2250)

(3) Franziska Speer : Die kleinste Fessel drückt mich unerträglich – Das Leben der Franziska zu Reventlow, München 1995 (Goldmann Taschenbuch 1490)

(4) Hans Eggert Schröder : Franziska Gräfin zu Reventlow – Schwabing um die Jahrhundertwende (Marbacher Magazin 8/1978)

(5) Helmut Bauer : Schwabing – Kunst und Leben, München 1998

(6) Johann Albrecht von Rantzau : Zur Geschichte der sexuellen Revolution – Die Gräfin Franziska zu Reventlow und die Münchner Kosmiker (Fritz Wagner 編 Archiv für Kulturgeschichte 所収)
(7) Hans–Rüdiger Schwab : München – Dichter sehen eine Stadt – Texte und Bilder aus vier Jahrhunderten, Stuttgart 1990
(8) Walter Killy 編 : Literaturlexikon – Autoren und Werke deutscher Sprache, Gütersloh/München 1988–1993
(9) 越智久美子編訳：女たちの肖像，泰流社1985

（上記の(1)は，刊行年こそやや古いが，259～320ページの60ページに及ぶ文献目録が充実していることは，フランツィスカの作品を採用したこれまでで唯一のドイツ語教科書と思われる „Vater, Wahnsinn, Krank“（「父 — 三つの小品」，朝日出版社，1989年刊）の編者河中正彦氏がその「あとがき」の末尾で述べておられるとおりである。

(2)に邦訳のあることは1989年2月19日付朝日新聞朝刊に載った種村秀弘氏の書評で知った（香川檀訳，筑摩書房刊）。この訳書は未見であるが，「エロチックな反乱」という標題は，内容から考えると，「エロスの反乱」としたほうがよいように思う。

(5)は，ミュンヒェン市立博物館での展覧会 „Schwabing – Kunst und Leben um 1900“（1998年5月21日から同9月27日まで）を機に出た大型豪華本で，ことにその前半でフランツィスカが頻繁に登場することから見ても，当時のシュヴァービングで彼女が占めていた地位が察せられる。

(6)は，レンプ氏からコピーを頂戴したもので，フランツィスカの全生涯を論じたものではなく，また彼女に対する見方にも厳しいところがあるが，ことにクラーゲス，ヴォルフスケール，ミューザームなどとの関係については，豊富な資料を駆使して詳細に論じている。

最後の(9)は，Hans Jürgen Schultz 編：Frauen. Porträts aus zwei Jahrhunderten, Stuttgart 1982（第2版）の後半部の訳書で，そこで扱われた10人の女性たちのうちの一人がフランツィスカである。）

あとがき

信岡教授から，本誌の同氏の停年退職記念号に何か書かないかというお誘いを受けた時，種々の理由でいささか躊躇したものの，結局，この機会

に，私がもっとも関心を寄せているドイツ女性の一人について，このようなものを書かせていただくことにした。

幸い，今年（1998年）5月にミュンヒェンを訪れたさい，旧知のレンプ氏およびヴェーバー夫人 (Gabriele Weber) にお会いし，新たな情報を入手することができたほか，折から市立博物館で開催中だった「シュヴァービング特別展覧会」を参観，フランツィスカに関するさまざまな資料を眼にし得たし，市立図書館の手稿部（通称 Monacensia）では，ヴェーバー夫人の御好意で，その一部をここに掲載した資料をコピーしたり写真に収めもした。なおこの撮影には，これまた旧知のカピッツァ氏 (Peter Kapitza) の次男で，いまは新進の写真家として全世界を股にかけて活躍しているエノ君 (Enno Kapitza) を煩わした。

また，ヴェーバー夫人の忠告に従って手紙を差上げた（フランツィスカの孫娘に当る）デル・ボンディオ - レーヴェントロウ夫人 (Beatrice del Bondio-Reventlow) からは，市立図書館で得たすべての資料を本稿のために自由に使って差支えないというお墨付を頂戴したうえ，同夫人の御斡旋で，ミュンヒェン博物館のマイゼ夫人 (Gabriele Meise) から，図版(3)および(4)で示した，フランツィスカの著作の初版本2点のカラー写真を貸与された。さらに，若干の法律用語については，福田平一橋大学名誉教授の御教示を得た。以上，お名前あげたすべての方々に心からお礼を申上げたい。

なお，本格的にフランツィスカを研究するとなれば，手紙や日記にしても，未発見のものを含めて，いまだに各所にちらばっているし，参考文献（Ⅰ）の文献目録にあげられているものに限っても，私が未見のもの，入手不可能なものがたくさんある。また，現在でもシュヴァービングの通称である ‚Wahnmoching‘ という言葉がフランツィスカの造語であること（本文参照）だけから考えても，前世紀末から今世紀初頭にかけてのシュヴァービング全盛期に彼女が果した役割は絶大なものだったらしい。こ

の点，「シュヴァービング振り」(Schwabingerei) に共感を持ち得ない私には，そもそも彼女を論ずる資格はないのかも知れない …… とまれ，彼女にまつわるすべての資料を総合・整理してその全体像を描き出すことは，私の能力をはるかに上廻る作業である。本稿で私は，私が彼女の全生涯および全作品の根幹をなすと考えている基本的特色のいくつかを紹介し得たにすぎないが，私にこのチャンスを与えて下さった信岡教授ならびに成城大学経済学部大学院当局に深甚の謝意を表するものである。

なお，外国の人名・著作名および地名は片仮名で表記したが，初出の場合に限り，（　）内に，原語と，著作名の場合は刊行年，人名の場合は — 可能な限り — 生没年を入れた。

また，参照文献中の著作および参考文献は，それぞれ Ⅰ.-(2)，Ⅱ.-(6) などと表示し，必要な場合はそれにページ数を添えた。